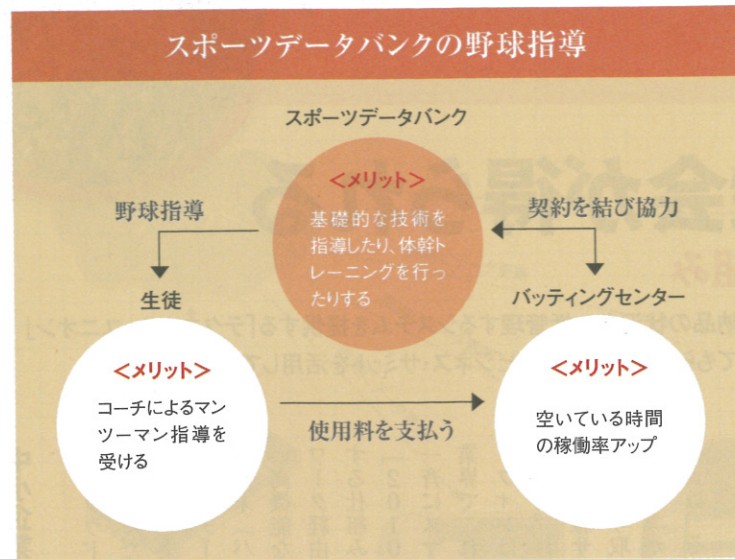


スポーツビジネスの可能性



「新しいビジネスを始めるなら、非営利団体の方が社会的に受け入れられやすい」と遠藤氏は話す。ただ利益体質をつくれずにいれば、事業の成長は望めない。収益を次の拠点へ

活動。それは後の人生を支える自信にもつながる」

同社では小中学生を対象に、野球、ゴルフ、サッカーなどのスポーツを指導している。とりわけ野球のバッティング指導に対するニーズは高く、事業開始から5年で、拠点を150カ所（フランチャイズ含む）まで増やしている。

人気の秘密はコーチによる個人指導にある。野球はチームスポーツ。その指導となると、「チーム単位で」と考えられるのが一般的だ。そんな中同社では別の手法をとる。

利用する生徒の大半は、少年野球のチームに所属する子どもたち。チームプレーは部活やクラブチームで学べる。

他方、個人のスキルアップは意外と難しい。練習がチームのために行われるためだ。そこで同社は学業における学習塾の役割に徹し、個人の

004年。掲げたのは「スポーツ教育」だが、当初は非営利団体としての運営も検討していた。ただ「ビジネスでしかないことがある」と遠藤氏は会社組織としての運営に踏み切った。

結果として現在、全国展開ができるまで事業は拡大している。

「新しいビジネスを始めるなら、非営利団体の方が社会的に受け入れられやすい」と遠藤氏は話す。ただ利益体質をつくれずにいれば、事業の成長は望めない。収益を次の拠点へ

「選手として実績のある人をコーチに招けば自然と生徒は増える」と考えた遠藤氏は、元プロ選手などに依頼し、子どもに高度な技術を叩き込む教育を行っていたのだ。

しかし指導対象はあくまで小中学生。コーチの実績があるうとなかろうと関係ない。高度な技術を教わる前に、基礎ができていないからだ。

最初はレッスンを楽しむにしていた子どもたちも、技術的な要求が高くなるにつれ自信を失う。練習がストレスになり辞めるケースが続出するのでも当然のこと

「教わる子どもは目線が低ければ自然とそうだった」と遠藤氏は明かす。指導するコーチも選手としての実績にとらわれず、コーチング能力を見て採用する。実績のないコーチの方が生徒の気持ちを理解して、うまく指導できることもあるという。

「指導者が与える子どもたちへの影響力は計り知れない。適切な指導者との出会いの場を設けて成功体験を得てもらいたい」

たった一球のボールを打てたことで子どもたちに夢と自信を与えられる。そこで得たものが長い人生に必ず役に立つ。その可能性を信じて疑わぬ遠藤氏の挑戦はまだまだ終わらない。

Company Profile

スポーツデータバンク
東京都中央区東日本橋2-6-11-4
資本金 1000万円
従業員 250人(アルバイト含む)
03-5823-7322
<http://www.s-databank.com/>

生徒一人ひとりのよい部分を伸ばす指導で、子どもたちを本気にさせるスポーツデータバンクのジュニアバッティングスクール



野球をマンツーマンで指導

これまで打てなかったボールが打てた。そのことが野球少年にとってかけがえない成功体験となる。スポーツを通じて学びの場を提供するスポーツデータバンクの遠藤利文社長はこう話す。

「できなかったことができた喜びは何よりも子どもを成長させる。スポーツはそんな成功体験を得る格好の

の投資につき込むことができたからこそ、拡大基調の今がある。全国の野球少年に成長する喜びを与えられる会社に。そんな遠藤氏の夢は、順調に実現されつつある。

とはいえ会社を設立した当初は苦労を重ね、生徒数は伸び悩んだ。その最大の原因は未来のプロ野球選手を育てるエリート教育を事業の核としていた点にあった。

「選手として実績のある人をコーチに招けば自然と生徒は増える」と考えた遠藤氏は、元プロ選手などに依頼し、子どもに高度な技術を叩き込む教育を行っていたのだ。

しかし指導対象はあくまで小中学生。コーチの実績があるうとなかろうと関係ない。高度な技術を教わる前に、基礎ができていないからだ。

最初はレッスンを楽しむにしていた子どもたちも、技術的な要求が高くなるにつれ自信を失う。練習がストレスになり辞めるケースが続出するのでも当然のこと

教育型

「ほめて伸ばす、野球指導が出発点に」 スポーツ教育で 社会を変えよう

全国のバッティングセンターで野球指導を行っているスポーツデータバンク(東京都中央区)。スポーツにおける教育としての役割に注目することで、ビジネスに奥行きと広がりを見せている。



「高度な技術を持っていても、お客さまに求められなければ価値を生み出さない」と語る遠藤社長

上達を支援している。エリートを養成するためのサービスマンのか。そんな疑問に対し、遠藤氏は明快に答える。「生徒の割合は、野球チームで活躍する場のない、いわゆる「補欠組」が大半だ」クラブチームでは、レギュラー選手の練習が優先され、補欠組は球拾いのようなチームサポートの役割に徹する方向になりがちだ。同社ではこうした子どもたちに基礎を教え込む。教えられる機会が少なかっただけに飲み込みは早く、いつしか打てなかったボールも打てるようになるというわけだ。

「スポーツで得た成長が自信となり、それが一生の財産となることもある」と遠藤氏は強調する。

生徒の立場で考える指導へ

スポーツデータバンクの設立は2